



発行所 島代万代新潟市
日本海区水産研究所
印刷所 第一印刷所
株式会社

(4) 京都府水試

効果

沖合漁場開発により経済的価値の判定並に沿岸漁場の合理的利用の資とする。

目的

漁場開発調査と併行して実施するもので、対馬暖流の消長と冷水塊勢力の消長を把握すると共に、漁況予報のために重要魚の環境及び漁場形成要因を究明する。

目的

福井・京都・兵庫の一府二県水試の連絡協調により、本年四月より漁況速報を主体に逐次予報の段階に進めたい。

方法

従来の月一回実施すると共に、浦島礁周辺、丹後海の観測を実施する。

方法

従来の海洋観測線をオキ堆まで延長、月二回の観測と魚群探索と漁場形成要因の究明に努める一方、生物統計調査と生物的調査を実施せしめる。

試験

昭和32年度事業予定統一 No. 3

効果

調査結果を漁況との関連において速報し漁況予報の資とする。

効果

漁況予報の対象となる、いわし・ぶり・あじ・さば・いかの重要な資源、魚群の洄游状況、漁獲状況等を速報し、豊漁による不安定感を幾分でも除去し、安定感をもたらせるものと思う。

二、魚群探索漁業試験
沿岸漁業不振の打開策としての沖合漁場開発と暖流系洄游魚の探索並に魚道調査を実施する。

効果

沿岸漁業不振の打開策としての沖合漁場開発と暖流系洄游魚の探索並に魚道調査を実施する。

方法

日本海区各水試

昭和32年度事業予定統一 No. 3

① 沖合漁場調査
② 漁業試験調査
魚探による洄游魚の魚群探索

三重網による漁獲試験

毛釣、天秤釣による漁獲試験
③ 沿岸漁場調査

沿岸の釣漁場並に定置漁場の漁場図の作製、水中照度と鯛漁場との基礎的研究

主なる項目 第74号

- 沿海州底曳に思う 山中一郎
- 日本海区各水試昭和32年度事業予定統一 (4) 京都府水試
- 沿海州底曳試験操業きまる
- 魚探
- 農林水産技術会議資源協議会
- 沿岸資源調査担当者会議
- 富山県水産学会研究発表会開催される
- 福井・京都・兵庫各府県水試連絡打合会 (第二回)

四、京水試魚礁実地試験

目的

築礁を設置してその周辺で行う釣漁業は従来から実施はして来たが、しかし近時の不漁に鑑みとに角魚探を沿岸に誘引、

滯留せしめ釣は勿論定置等にも貢献する方法を研究しようとするものである。

方法 天然礁或は人工魚礁の周辺に築の垣網式の閉網を敷設し、なおこれが周辺或は内側に陰影をつくるため「漬」を設置して

漁遊魚と定着性魚の誘導、滞留を図るとともに海のギャングである鮫を開網を防禦しようとするものである。

効果 この方法ですべき・いなだ(ぶり仔)等の増産は必至と見られ海況地形さえ許せば相当の普及性も見込まれるのではないかと思われる。

五、すずき漁獲能率化試験

目的

すずきは従来延繩か一本釣で漁獲されているが、これを定置網の二重落や又改良臺灣等により増産を図らんとするものである。

方法

先達漁船を中心とする研究組合により長期統続的共同研究を行い成果を上げる方法をとるものである。

効果 定置網においては従来よりはるかに増産が期待され、また築礁においては釣のみ

に依存しているものを底盤によりその労力と時間を非常に節減出来るものと思われる。

六、海苔増殖試験事業

目的

岩海苔と浅草海苔を対象とし、岩海苔については、糸状体の培養、これによる人

工採苗、陸上における栽培試験を行い浅草海苔については京都府沿岸において企

業化する可能性の有無を調査する目的をもつて養殖試験を行なう。

方法

岩海苔の陸上栽培試験はコンクリート水槽内で各種肥料を注加し搅拌及び干出操作を加える。浅草海苔については松川浦千葉県・愛知県より種子を移植し重ね播種により採苗、人為的干出による養殖を行う。

効果

本試験により岩海苔においては塙害田の高度利用、浅草海苔については沿岸内湾(久美浜湾・宮津湾・与謝内海・栗田湾・舞鶴湾)の冬季漁閑期の利用が考えられる。

七、かき養殖技術改良普及事業

目的

従来の棚式簡易垂下養殖では漁場に制限があり、未利用水面の活用には是非共筏式養殖に切換えるか、又はこれを併用す

る必要がある。然るに筏式は費用の点、

養殖成績の点において未だ充分に研究理解されて居らぬため、業者は事業の拡大

を懸念している。ついては筏式の経済調査、養殖試験を行い、これに基づく技術普及を行う。更に本年は地元産の種苗を採取、一年かきとし出荷するために採苗、養殖試験を行う。

方法 (1) もがい採苗試験も前回同様及を行なう。

(2) 岩海苔は湾内数点に建竹し、「マブシ」を垂下し採苗する。

(3) 真珠人工採苗は湾内数点に建竹し、「マブシ」を垂下し採苗する。

(4) もがい採苗試験も前回同様及を行なう。

(5) このしら人工孵化放流試験は三十一年度において人工孵化試験の成功を見たので産卵場の調査、孵化後の飼育に重点を置く。

(6) くらだい人工孵化放流試験は稚魚の飼育設備方法の試験研究を行う。

方法 筒式垂下養殖により未利用の水面を活用することとなれば現在に数倍する産量を挙げることが出来る。なお一年かきの養成が可能となれば多角的經營方法が考えられ、更に水面の高度利用が考えること

が出来る。

効果

本調査により久美浜湾の生産が逐年増大し、魚貝類の資源保護に寄与する所極めて大であると信する。

八、久美浜湾開発調査

目的

昨年に引き続き久美浜湾総合開発の一環として、(1)環境調査 (2)イワシ放流効果判定調査 (3)真珠人工採苗試験 (4)もがい採苗試験 (5)このしら人工孵化放流試験 (6)くらだい人工孵化放流試験等を行う予定である。

方法 (1) 環境調査は各月四回湾内五定期の精密観測を行う。

(2) いわし放流効果判定調査は放流後、開禁まで数回に分けて成長度、肥満度

を測定し、從来未明のまま行われていった湾内放流許容量、歩留等を算出せんとする。

方法 (3) 真珠人工採苗は湾内数点に建竹し、「マブシ」を垂下し採苗する。

(4) もがい採苗試験も前回同様及を行なう。

(5) このしら人工孵化放流試験は三十一年度において人工孵化試験の成功を見たので産卵場の調査、孵化後の飼育に重点を置く。

(6) くらだい人工孵化放流試験は稚魚の飼育設備方法の試験研究を行う。

方法 (1) 環境調査は各月四回湾内五定期の精密観測を行う。

(2) いわし放流効果判定調査は放流後、開禁まで数回に分けて成長度、肥満度

を測定し、從来未明のまま行われていった湾内放流許容量、歩留等を算出せんとする。

方法 (3) 真珠人工採苗は湾内数点に建竹し、「マブシ」を垂下し採苗する。

(4) もがい採苗試験も前回同様及を行なう。

(5) このしら人工孵化放流試験は三十一年度において人工孵化試験の成功を見たので産卵場の調査、孵化後の飼育に重点を置く。

(6) くらだい人工孵化放流試験は稚魚の飼育設備方法の試験研究を行う。

上せしめることを目的とするものである。

方 法

調査内容は内湾について海洋化学並びに生物調査、底質調査、これらに附帯する各種調査を実施するものである。

効 果

以上を実施することによつて内湾漁業の振興管理を科学的に向上せしめんとするものである。

一〇、鰐生態調査

目 的

鰐の環境と生理生態の変化を把握し、併せて水産物の高度利用上の基礎資料を得るためである。

方 法

A 魚体調査

月四回五〇~一〇〇尾について体長組成、二〇尾について精密測定を前年に引続き実施する。

B 化学調査

月二回二〇尾について魚体成分量を前年に引続き実施する。

効 果

他府県と共同調査することにより鰐の済游状況を知り、漁況予報の資とすると共に水産物の高度利用上の資とする。

一一、鰐資源調査

日 的

昭和二四年以来、鰐漁業資源の維持と合理的な漁業の永続を計るため各種緊急的恒

久的施策に必要な資料を整備するため全国的組織を以て鰐資源調査を実施している。

方 法

日本海区水産研究所の調査要項に従い魚体の生物学的調査即ち体長体重生殖腺の熟度並びに重量、食餌背椎骨数等の調査

を週に一回実施し、一日の測定尾数五〇~一〇〇尾を測定することを原則としている。

効 果

水産資源の最終的目的である漁況予報の資料にする。

一二、水産機械取扱技術指導

目 的

漁業の機械化に欠くことの出来ない漁船機械の整備、取扱技術指導を行う事によ

り漁船の事故防止並びに操業能率の向上に資せんとする。

方 法

A 各海区水研のイワシ資源

農林生産技術会議 資源協議会

月四・五日両日、農林省会議室で技術会議

農林水産技術会議主催の資源協議会が三

月四・五日両日、農林省会議室で技術会議

出席者、講習会並びに検診を実

施し、機関取扱者の技術向上に努める。

なおこの外漁協の要望により隨時検診並

に講習会を実施する。

三カ月に一回程度定期的に各漁協単位に

巡回し、講習会、懇談会並びに検診を実

施し、機関取扱者の技術向上に努める。

これに加え、外漁協の要望により随时検診並

に講習会を実施する。

沿 海 州 底曳 試験操業きまる

沿 海 州 底曳

試験操業きまる

長い間の業界の念願であった沿海州底曳試験操業は、春秋二漁期に区分して、実施することになった。春期分は四~六月間で

石川五隻、新潟六隻、秋田一隻、島根五隻合計一七隻が参加して六航海実施することになつてゐる。(日本水研)

第一回は四月上旬指揮船銀山丸が第一回航海の指導に当ることになつており、日本水研の資源調査項目を実施することになつて

いる。(日本水研)

第二回は五月上旬指揮船銀山丸が第一回

航海の指導に当ることになつており、日本水研の資源調査項目を実施することになつて

いる。(日本水研)

第三回は五月上旬指揮船銀山丸が第一回

航海の指導に当ることになつており、日本水研の資源調査項目を実施することになつて

いる。(日本水研)

沿海州の沖合で、この四月から底曳の試験操業がはじまることになつて、関係者の張り切つてゐるのは当然のことである。

業界の長い間の希望だつただけに

おそれく、操業区域は距岸一五六

浬、そこはビーチー大帝湾の沖合に當

るところであろうが、今までの調べによると大陸棚の端か、それとも大陸傾

斜面に當るところである。深度も時に

は三〇〇メートルの處で操業する場合が

生起する事と思う。

五月から六月にかけて深所帶の底魚が、浅所帶へと次第に移つて行く頃で

あるから、こうした魚の移動してしまつて、思いもか

けない問題が生起するかも

知らない。こんな事は百も

承知のことであるうが、沖合の仕事で

は、日頃承知のことが忘れられてしま

うことが多いので、格別の注意をねがう処である。

それからもう一つ大事なことは、こ

の水域の資源の問題である。この公海

でのどの程度漁獲が許されるか、又はこの

水城の資源と沿海州沿岸資源とがど

んな関係にあるかなどの問題は試験操

業によつて得られた魚を検討することによつてきまるのだから、操業に當る

各船は資料の採集に當つては格段の尽

力を願いたい。

既に出漁の各船に対しては、日本水研が調査項目や材料採集方法等を明記した野帳を用意して、調査について万全の措置を講じている。

(3) 今後發展させるべき問題点の各項目につ

いて討議した。
マイワシに関する各水研の見解は次のとおりである。

- (1) 東海区 マイワシ資源は昭和二十六・七年頃までは上昇し、その後は下降気味であるが、原因は開拓強化とは認め難い、二三年先までの漁況予測はすでに行つてゐるが、さらに長期の予想を行うには、初期生残率を決定する要因について、また漁獲努力の分布等についての知識および資料調査、環境調査等が必要である。カタクチイワシは漁獲に陥っている傾向はないが、調査がマイワシに比しておくれているため予測はさらに困難である。
- (2) 南海区 マイワシは現在最低の線で漁業と平衡にある。当才魚の漁獲により、一才魚への補給尾数は近年殆んど一定で、四億尾をこえない。当才魚の自然死亡は僅少であり、当才魚の保護対策、漁獲制限が高令魚の漁獲に好結果を与えるであろう。
- (3) 西海区 資源は二十七年以来低下しつつあり、親魚の生残率も逐年低下しつつある。この原因は不明であるが、漁獲強化の影響も否定出来ないであろう。長期予報はまだ困難であり、これには資源変動の要因が十分究明されなくてはならない。
- (4) 日本海区 マイワシは戦後一時増大したが、再び減少した。しかし、この原因を酷漁に帰することは困難である。日本海大羽イワシのみ若干増産し得る。この一、二年は悲観的であり、急激に資源は回復しない。大羽イワシのみ局地的な好漁があるかも知れない。今後、漁獲努力の内容に関する統計資料の整備のほか、自然減耗の要因

との機構、魚類相の変動にあたえる人為的影響等に力を入れる必要がある。

- つづいて今後の問題について討議があり、「資源の動向を判断する」研究を促進する必要のあること、緊要問題の統一的研究を行つたための機関を東京に設けることの必要等に関する意見の交換が行われたが、最終的決定には到らなかつた。
- (2) 底魚資源調査（三月七日）
(4) 各海区昭和三十二年度計画
(4) 手塚企画官挨拶
(4) 阿部企画官挨拶
(4) 調整第一課係官より旋網調整問題について水研と意見交換
(4) 担当者会議の運営方法について……
(4) 担当者会議を常任委員会的のものとし強化するための案を所長会議までに各海区で考へることにする。

- (4) 各海区事業計画の発表
(4) 海洋生物放射能調査（科学技術庁立案）の実施計画について係官より説明
(4) 今後の問題点について……昨日の技術会議協議会のありさまから見て、自然死亡率についての研究の緊要性が認められたので、これについて閉会後小委員会を開き更に検討することにした
- (4) 次回のプログレスリポート及び担当者会議の予定……担当は北水研、会議は秋季に東京で開催と決定
- (4) 小委員会……自然死亡率推定方法の具体的方策について検討したが結論が得ず、五月末頃までに各研究者からこれに対する意見を研究第一課に提出することとした。
- (4) 研究会議の運営方法について……従来の担当者会議を研究発表的なもの（年二回）と事務的なもの（年一回）に別け適切な分科会を設けることとする
- (4) 資料のとりまとめ方法……プログレッシブポートは数年に一回発行するが、その間の資料は毎年会議の際に発行する。この際、資源の動向についての意見および新知見は必ず記すことにする
- (4) 次回の会議
シンボジウム……北海道・東北・日本海は六一七月、北海道で（対馬暖流シンボジウムと併催）南海、西海、内海は八月頃福岡で、外に全国的なものを三月頃東京で、担当者会議、三月頃東京で

- 尙、従来底曳関係の企画官は阿部技官であつたが、今回から手塚技官（同補佐は角和、大鶴技官）となつた。
- 福井、京都、兵庫各府県水試連絡打合会（第二回）
標記三県連絡打合会が、去る三月八日京都水試において開催され、各府県の関係者が出席。この度の第二回目の会合に於いて予報の実施に当つて、水温其他と漁況についての一応の仮設を次の様に決められた。
- 大羽……表面水温一二度からはじまるとする。
- 中羽……今のところ、仮設の段階まで達まざば……七五米層附近の水温一二度からはじまる。
- 以上から、最盛期二五度
- あじ及ぶり……これから資料を集めて仮設の樹立に進みたい。（京・水・試）
- 新潟市東部中学校で関係者約三〇名が参集して開催された。
- 発表題目は左記のとおりであるが、この会は産業教育ならびに農業にたずさわつてゐる人々の発表であるだけに現実の漁業のありかたというものが論議の中心になつた。日水研からは依頼により永田技官が出席した。